

15のいす

天職

平成14年（2002年）1月記
奥田昌道

最高裁判事の仕事は大変でしょうとよく人から言われる。大変といえば大変だが、私はいつしか、これも天が授け給うた仕事（天職）であり、天が授けた仕事なら天が援けて下さるのである、自分の力だけでやれるはずがないのだから、と思うようになった。人間が太陽の恵みで生きてるように、私の内面は太陽のように私を照らし生命づけ、支え、導いて下さっている、私を超えた、絶対次元の現実の愛の実在者によって生かさされている。「お前の帰依し、全托するお方はどのようなお方か」と問われるなら、私は躊躇なく、「天界の太陽だ。宇宙の太陽が地球上の生きとして生ける者を無条件に生かしているように（地球は太陽から一方的に受けとるばかりで、何一つお返しをしていない）、天界の太陽ともいふべきお方は、無条件・絶対の無限の愛のお方だ。」と答える。

日常の人間関係で気まずいことがあったり、仕事の面で行き詰まったり、押しつぶされそうになったり、そのほか、いろいろなことで落ち込みそうになるとき、「私がついているから大丈夫だ」と励ましていただく。自分の手（能力）に余ることも、いつしか道が拓かれて、なんとかなる。ことを幾度味わったことか。私は気が小さく、すぐに人の言葉（批評）が気になる方なのだが、それに捉われそうなときに、その愛なるお方に心を向けていると、いつしかそうした思い煩いから解放されている。

それともう一つ。最高裁判事の仕事は、主として判決という形で社会に現れるわけであるが、表に現れた「判決」は、実は氷山の一角であって、海面下の大きな見えない部分があることを知っていたいただきたい。それは、裁判所内部で黒衣の役割を引き受けて判事の仕事を支えて下さっている多くの人たちの働きのことである。組織体である以上は当然との見方もあろうが、私は、目立たないところで黙々と職責を果しておられる方々に、心から感謝したい。

『15のいす』平成14年1月記より転載

